

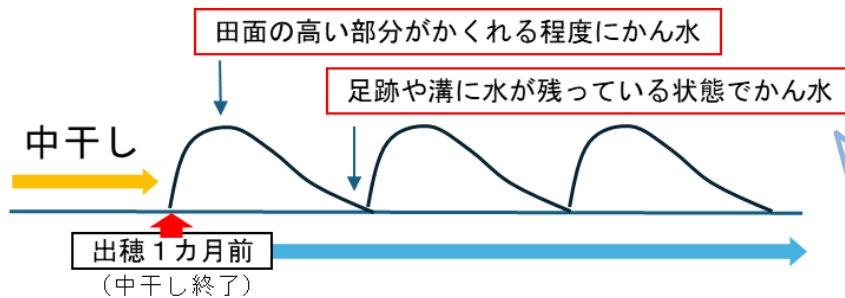
生育診断に基づき穂肥を施用しましょう！

- ☑ 飽水（ほうすい）管理で土壌の水分を維持
- ☑ 幼穂長、草丈、葉色を確認し、適切な穂肥施用を
- ☑ 出穂期に高温が予想され、葉色低下が見込まれる場合は3回目穂肥を施用

1 中干し後は飽水管理を行きましょう！

- ・「水尻を止めた状態で、かん水と自然減水を繰り返す管理（飽水管理）」を出穂期後25日まで繰り返しましょう。

飽水管理のイメージ



2 生育診断を行って穂肥を施用しましょう！

- ・穂肥は倒伏や品質・食味に影響することから、生育診断を必ず行い、施用時期や施用量を判断しましょう。

(1) コシヒカリの穂肥施用時期のめやす（近年値）

地域	田植日	出穂期	穂肥施用時期のめやす	
			1回目 (出穂期 18～15 日前)	2回目 (出穂期 10 日前)
平坦地	5月16日	8月3日	7月16日～19日	7月24日
	5月21日	8月5日	7月18日～21日	7月26日
高標高地 (400m程度)	5月21日	8月9日	7月22日～25日	7月30日

普及指導センター調査ほ（H28～R7年の平均値）。
平坦地：南魚沼市徳田・五日町、高標高地：湯沢町土樽

本年の出穂期予想等は、最新の生育速報でご確認ください

(2) 分施栽培における穂肥の必要性和主な効果

施用時期	1回目	2回目	3回目
	出穂期 18 日前	出穂期 10 日前	出穂期 3 日前まで
施用の必要性	△ 加減して慎重に	◎ 確実に施用	○ 施用を前提に判断
主な効果	籾数の確保 →収量の安定化	籾の充実度向上 →後期栄養確保により、登熟向上・品質低下防止	
注意点	・下位節間の伸長に影響するため、穂肥診断に基づいて施用	・後期栄養を確保し、登熟向上を促すため確実に施用	・近年は高温が続いているため、施用を前提に葉色診断により判断 ・ <u>挫折倒伏の原因となる下位節間の伸長には影響しない</u>

※近年は、全量基肥（一発）栽培でも高温により、3回目時期の追肥が必要になる場合が多くなっています。葉色が低下している場合は、追肥を検討しましょう。

(3) 出穂期及び穂肥時期の診断（コシヒカリ）

【幼穂長の確認方法】

- ① ほ場内の平均的な株から、最も長い茎と2番目に長い茎を抜きとる。
- ② カッターなどで茎を割り、幼穂の長さ（幼穂長）を確認する。

表1 幼穂長と出穂前日数の関係

出穂前日数	幼穂長 (cm)	
24日	0.1	穂肥診断
20日	0.2	
18日	0.5~1.0	穂肥1回目
12日	4.0~6.0	
10日	8.0	穂肥2回目

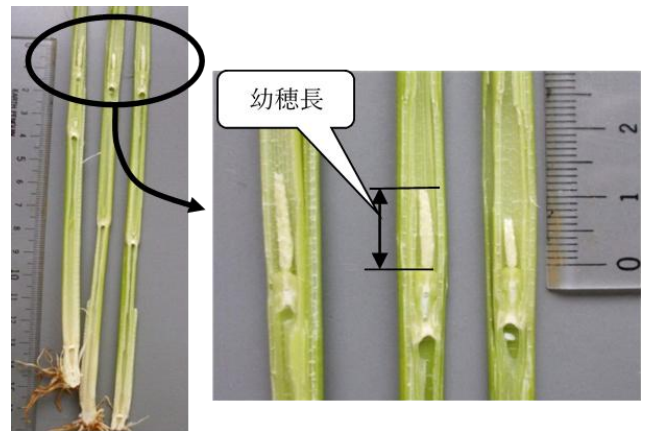


図1 幼穂長の確認方法

(4) 1回目の穂肥（出穂期 18 日前）：出穂期 24 日前の穂肥診断により判断

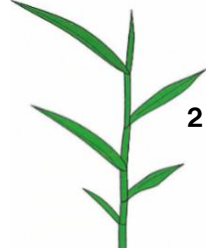
【草丈の測定】



○地際から茎の先の葉をたてて、稲の最も長いところを測定

【葉色の測定】

1枚目



2枚目



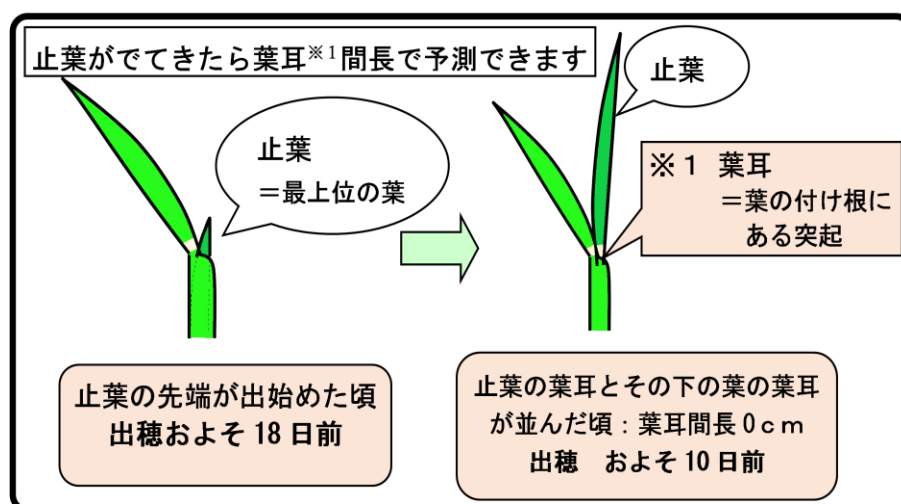
○最も丈の長い茎（主茎）を選ぶ
○測定する葉は、完全に開いた上から2枚目の葉で、葉の長さの2/3位のところで、まん中のスジを避けて測定

表：1回目穂肥の散布めやす

草丈	葉色		1回目穂肥の時期と施用量
75cm以下	薄い	SPAD30 以下、 群落 2.5、単葉 3.5	出穂期 18 日前、 窒素成分 1.5kg/10a
	並み	SPAD30～34、 群落 2.5～3.5、単葉 3.5～4.5	出穂期 18～15 日前、 窒素成分 1.0～1.5kg/10a
	濃い	SPAD35 以上、 群落 3.5、単葉 4.5	出穂期 15 日前、 窒素成分 0～1.0kg/10a
80cm程度	薄い	SPAD30 以下、 群落 2.5、単葉 3.5	出穂期 18 日前、 窒素成分 0.5～1.0kg/10a
	並み	SPAD30～34、 群落 2.5～3.5、単葉 3.5～4.5	出穂期 15 日前、 窒素成分 0.5～1.0kg/10a
	濃い	SPAD35 以上、群落 3.5、単葉 4.5	施用しない
85cm以上	薄い	SPAD30 以下、 群落 2.5、単葉 3.5	出穂期 18 日前、 窒素成分 0.5～1.0kg/10a
	並み	SPAD30～34、 群落 2.5～3.5、単葉 3.5～4.5	出穂期 15 日前、 窒素成分 0～1.0kg/10a
	濃い	SPAD35 以上、群落 3.5、単葉 4.5	施用しない

(5) 2回目の穂肥（出穂期10日前）：確実に施用

- ・ 2回目穂肥は、葉色や後期栄養を維持し、登熟向上と品質低下を防止するため、出穂期10日前に1.0kg～1.5kgをめやすに確実に施用しましょう。
- ・ 1回目穂肥を施用出来なかった場合においても、2回目穂肥は稈長の伸長に影響しないことから、確実に施用しましょう。
- ・ 全量基肥（一発）栽培のほ場で、葉色が急激に低下した場合は、2回目穂肥の時期をめやすに追肥を施用しましょう。



(6) 3回目の穂肥（出穂期3日前）：施用を前提に検討

- ・ 登熟期の高温が予想され、出穂期の葉色がSPAD値32を下回る恐れがあるほ場は、走り穂が見え始める頃（出穂期3日前）までに速効性肥料を施用しましょう。分施の場合の施用量は、窒素成分1.0kg/10aを上限に調整。
- ・ 全量基肥（一発）栽培の場合も、出穂期の葉色がSPAD値で32を下回る恐れがあるほ場では施用しましょう。

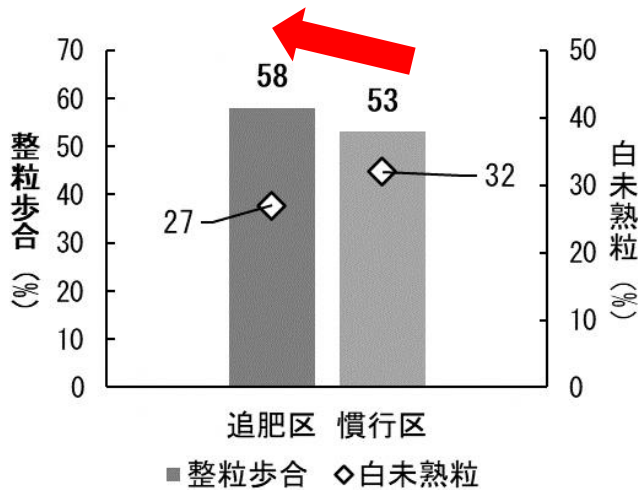


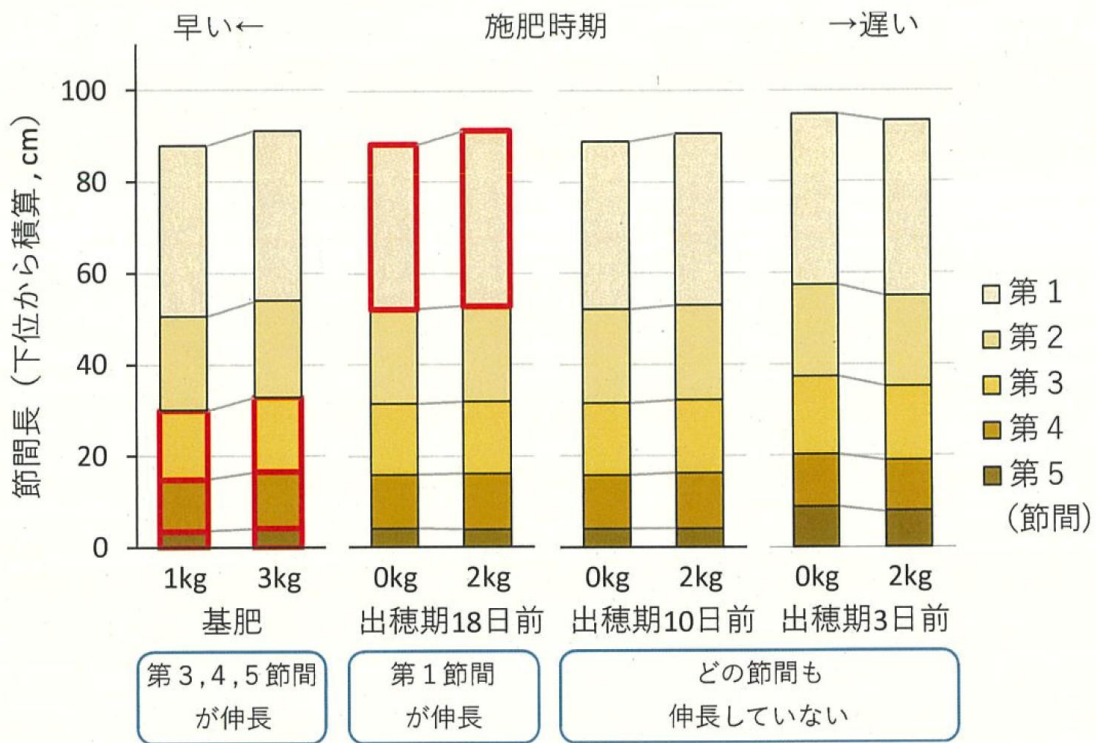
図3：出穂期3日前の追肥試験結果（R5 九日町）
出穂期3日前の追肥（N成分1kg/10a）により、
白未熟粒が減少し、整粒歩合が向上した。

しゅっすいき
出穂期とは

○穂が1部でも出たらその茎は出穂したとみなし、ほ場全体の40～50%が出穂した日が出穂期です。

(7) 穂肥と稈長の関係について

- ・ 2回目穂肥時期（出穂10日前）以降の追肥は、稈長の伸びに影響しません。必要量の穂肥（追肥）はしっかりと施用しましょう。



基肥・出穂期18日前・10日前穂肥：H27、3日前穂肥：R6
(農業総合所作物研究センター)

お問い合わせ：普及課 作物担当 TEL 025-772-3337 Fax 025-772-2612

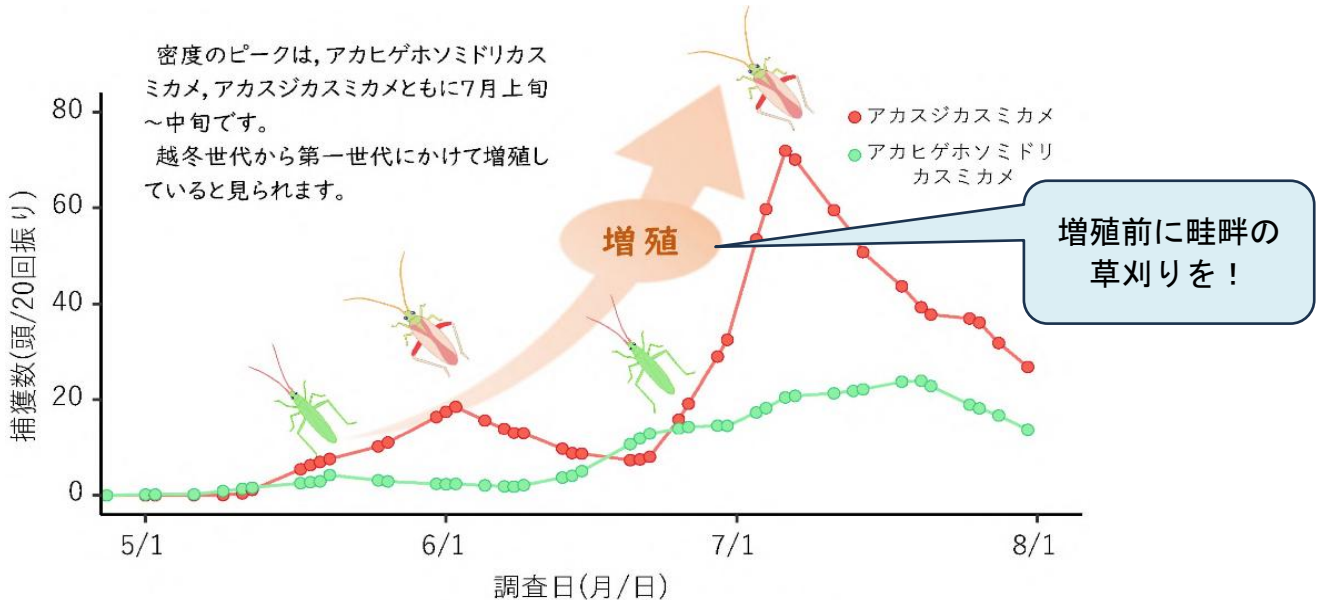
普及指導センターからの稲作情報について、配信不要の方は問い合わせ先まで連絡ください

適切な病虫害防除で被害を防止しましょう

1 雑草管理及び薬剤防除で斑点米カメムシ類の被害を防止しましょう！

(1) 耕種的防除：草刈りの徹底

- ・ 田周辺の農道・畦畔や水田内の雑草管理を徹底し、斑点米カメムシ類の密度低減や水田内の侵入防止に努める。
- ・ 3週間程度の間隔（雑草が結実しない間隔）で刈取りを実施する。
- ・ 7月中・下旬の一斉草刈りを実施する。なお、出穂直前の草刈りはカメムシ類を水田内に追い込む可能性があるため避ける。
- ・ 水田内のノビエ、ホタルイ等の雑草は早めに除去する。



グラフ 出穂したイネ科雑草地の2種カスミカメシ類捕獲数の推移

※捕獲数は2021～2023年に調査した6地区の成虫捕獲数の平均値。
出穂したイネ科雑草が存在する雑草地を1地区あたり16地点調査。

出典：新潟県農業総合研究所 作物研究センター

(2) 薬剤防除：薬剤の適期散布

- ・ 斑点米カメムシ類の多発地域及び前年に斑点米被害が多かったほ場では、薬剤による適期防除に努める。
- ・ 薬剤ごとに散布適期が異なるため、散布前に確認する。

【防除時期のめやす】

粒剤	出穂期ごろ
粉剤・液剤	出穂期3日後（穂ぞろい期）～出穂期7日後

* 粒剤は、水深3cm程度の浅水で散布。多雨が予想される日は散布を控えましょう。
* 薬剤により、2回目の防除が必要な場合があります。

【カスミカメ類の水田への移動時期】



出典：新潟県農業総合研究所 作物研究センター

(3) 物理的防除：色彩選別機の効果的な使用

- ・色彩選別機を使用する際は、歩留まりを確保するために、選別状況を確認しながら流量や選別感度の設定を適切に行う。

2 地域や各ほ場での発生状況に応じて病害防除を実施しましょう！

(1) いもち病

- ・コシヒカリ BL 以外の品種では、葉いもちを発見したら直ちに粉剤や液剤等による防除を行う。また、葉いもちが上位葉で発生しているほ場では、粉剤または液剤による穂いもちの追加防除を実施する。
- ・新之助の穂いもち防除は予防的防除を基本とする。出穂前に上位葉で病斑の発生が確認された場合は、追加防除を行う。

(2) 紋枯病

- ・早生品種や分けつの多い品種、前年に多発したほ場では発生しやすいため、ほ場をよく観察する。
- ・粒剤は、出穂期 2 週間前頃までに散布する。液剤や粉剤は、株元に薬剤が届くよう落水したうえで、出穂期 10 日前～出穂期直前までに散布する。

(3) ごま葉枯病

- ・毎年多発するほ場では、予防的防除を実施する。
- ・砂質土壌や地力の低いほ場等で発生しやすいため、後期栄養を確保に向け適正な穂肥施用と根腐れを起こさない水管理を行う。
- ・次年度以降の対策として、鉄やマンガンを含んだ土づくり資材を活用する。

お問い合わせ：普及課 作物担当 TEL 025-772-3337 Fax 025-772-2612

普及指導センターからの稲作情報について、配信不要の方は問い合わせ先まで連絡ください